

ブログ本「生きる建築をつくる」
長く愛され続けられる建築を「生きる建築」と考えています。

野々瀬 徹(株式会社野々瀬建築都市設計事務所)

ブログ本；ブログを整理しながら1冊の本に編集していきます。現在編集中心

目次

生きる建築をつくる3つのポイント。

第一章 大震災に強い建築にする。

第二章 魅力が持続するデザイン「いき」の建築にする。

第三章 機能更新を受容できる建築にする。

第一章 大震災に強い建築にする。

人は災害に弱い生物です。建築には災害から生命と財産を守る重要な役割があります。建築が大震災で破壊されれば中の人の命を危険に晒すこととなります。しかしながら、歴史的には自然災害の強さは法律で定めた構造基準を越える場合が多く、歴史的に想定外の震災と呼ばれることは東日本大震災の災害でも繰り返されました。よく間違われることですが、構造基準は最低基準であり、震災に強い建築を保証するものではありません。ですが、現在の建築は基本的に構造基準を満たすことを要件として建てられています。最低基準故に、想定外の震災に十分に対応できないのが現実です。

こうした中、最近、想定外の大震災にも対応可能な建築を、技術的にもコスト的にもつくることにチャレンジしている革新的技術が生まれています。

私たちは、そのような実施可能な革新的技術を導入し、災害が発生してから復興するのではなく、大地震による災害の発生を未然に防ぐ、或いは最小化するように建築を革新することに尽力していきたいと考えています。

大地震Ⅱ大震災とせず、大地震Ⅱ小震災にすることが、これからの時代の建築だと考えます。

一 南海地震対策の第一歩

建築設計者として南海地震対策に何ができるか？

ずっと考えてきました。

阪神淡路大震災の折に調査ボランティアに行ったときの経験からです。

大地震は地域も個人生活も破壊します。

昨年の311以降その思いが更に強まりました。

岩手県に震災調査に行つて、惨状を目の当たりにして、

できることから南海地震対策に取り組みもうと思いましたが、

「大地震乱の時代」と名付けた地震学者さんがいますが、

徳島の地も大地震乱の渦中にあるとおもいます。

そうした中で、

できるだけ人の役にたちたいと望んでいます。

今、

大地震乱から命を守り穏やかな生活を維持しつづけられる対策をとることは緊急性が高いとても大切なことだと思います。

南海地震に襲われたときに建物が倒壊や大破すると生命と財産を一瞬のうちに失う危険性があります。命を失わないまでも、住む家や業務の場を失うことになれば、その結果、生活基盤が大きく損壊します。しかし、

阪神大震災などの大震災の時にも、倒壊や損壊して使えなくなる建物もありましたが、一方、少々被害を受けても短期間で補修してそのまま使い続けられた建物が圧倒的に多くありました。地震で倒壊などの大被害を被ると復旧への莫大な費用と時間が必要となり生活へのダメージが大きくなりますが、

少々の被害ですと復旧費用は少額で短期間で補修を終えて健全な生活を維持できます。ですので、

大震災が発生する前に、震災後も建物を補修して使い続けられる耐震性のレベルにしておくことが、大地震動乱の時代を生き抜く知恵、道であると思います。

そのために、有効な技術として、耐震診断・耐震補強設計・耐震補強工事があります。徳島でも近年公共建築の耐震診断・耐震補強は急ピッチで進められてきました。しかし、残念ながら民間の建物や住宅の耐震診断・耐震補強はあまり進んでいません。理由の一つに、耐震補強についてあまり知られていないことがあると思います。

耐震診断・耐震補強設計サービス、耐震補強工事がどのようなものか、いろんなレベルでのメニューをわかりやすくご説明した小冊子を準備中です。

二 耐震診断・耐震補強計画・設計

建物には

良好な機能、美しさ、耐久性そして安全な構造性能が求められます。

建物は立地、用途、使用の特色などで求められる要素はそれぞれ異なります。一つとして同じ建物はありません。

ですので、耐震診断・補強計画の解答は多様にあると言えましょう。その中から一つの最適解を求めていきます。

的確な耐震診断、補強計画は構造解析だけでできるものではありません。立地、用途、機能性、美観、耐久性、構造性能などを総合的に調査評価し、的確な判断をすることがとても重要です。

野々瀬建築都市設計事務所は、計画、意匠事務所として建物を総合的に調査判断し、適切な耐震工法を選択しながら、全国から優秀な構造設計者をパートナーとして起用して耐震診断し、最適解の補強計画・補強設計に取り組み、皆様の信頼に応えていきます。

現在、耐震診断・耐震補強全面リニューアル設計をしました大学校舎の監理中です。

大学体育館の耐震診断・補強リニューアル設計(パートナー 大阪の構造事務所)、病院の耐震補強診断、計画(パートナー 東京・札幌の構造事務所)を進めています。

三 耐震補強の結果得られる南海大震災から守る

小冊子「建築設計者が提案する南海地震対策」(仮題)の一部を書きました。事務所HPのABOUT USの中の

【耐震診断・耐震補強リニューアルの設計監理／南海地震対策・長期使用対策】欄にPDFファイルとして掲載しました。

■「耐震補強の結果得られる強さ(ゴッパ)」

<http://www.nonose.jp/about/photo/1329660301f0-file3.pdf>

(1)耐震診断の目的

(2)新耐震基準の耐震性能

(3)補強すれば、地震後継続使用できるのでしょいか？

震度階ごとに想定される被害を書き、震度7の大震災に遭遇しても耐震補強をした建物は、ほとんどは被害はないが。あつても小破、中破程度の被害であり、比較的簡単に補修して継続使用が可能であると書きました。

四 建築材料の放射能検査被爆から子供たちを守る

わかりやすく簡潔に、書きましたので是非お読みください。健康に害を与える室内環境汚染対策は日本でもかなり進んできました。今では、幼稚園、保育所、学校などの施設の新築時には室内空気中の化学物質の濃度(シックハウス)を測定し、安全を確認することになっています。

ここまでの間に十数年以上の年月が日本ではかかりました。ドイツなどでは早い時点で対策が進められていました。日本は健康、安全対策がドイツなどに比べて少なくとも十数年は遅いと思います。その間、シックハウスに敏感な方など多くの方がアトピーなどの健康被害にあわれました。

今、ドイツなどの医師、科学者などから福島原発災害における日本の放射能被爆対策での被爆危険性の指摘が出されています。

しかし、日本では室内環境汚染対策進行の歴史から推定しますと十数年かけてゆっくりと対策を本格化する可能性があります。

その間に被爆が進行すると子供の命と健康に取り返しがつかないことが危惧されます。もちろん大人も影響が出ます。

リスク管理としては推定される危険は避けたほうがいいと思います。

本日、

放射能健康相談 com 診察室より No.1http://www.houshanousudan.com/extra/no1
を読みました。

「首都圏で放射能の被曝を心配され、来院した60名以上を診断しました。そして血液検査の結果が出ました。」から始まり、

「東京近郊の高汚染地域に住み続ける子供たちから、将来健康被害が高率に出る事を心配しています。親に意見を求められた時には、避難を進めています。」で終わる報告書です。

医師グループによるリアルな福島放射能汚染による子供達への影響の報告のようです。日本人の放射能被爆による健康被害が心配になってきたようです。

私たちが1980年代後半から徳島杉と漆喰などをつかった家造りに積極的に取り組みました一つの理由として、シックハウス症候群対策として、家を自然材料でつくろうと考えたからでした。

これからは、放射能被爆を避けるために「放射能汚染されない建築材料」をつかうことに取り組みます。調べますと徳島では放射能検査を「徳島県薬剤師会検査センター」がはじめています。私たちも化学物質の濃度測定を依頼しているところです。疑問のある建材については施主のご理解を得て測定することになります。

<http://www.tokuyaku.or.jp/tokuyaku/kensa/foushasen.html> 検査費は1万円〜となっています。

五 地震予測情報の購入について

徳島の各地が南海地震、東南海地震により大きな被災を受けることは歴史的に明らかです。東日本大震災の後、近未来における徳島の被災を現実味をもつて気にする方が増えています。被災初動では個人や家族、あるいは私企業や法人は自力で被災に対応する必要があります。

大震災に対応するには、何よりも地震の発生予測が効果的とおもいます。予測が有れば、心づもりができます。

台風又来襲がわかれば防災対策ができるのと同じです。

台風の進路や勢力の予報が外れることも多いですし、予報されていても被害はですが、それでも予報があることが

被害の最小化には役だっていると思います。
ですので、

積極的な地震防災対策の基本情報として「地震予測」は欠かせないものと思います。

気象庁が地震予測をするべきだと思っておりますが、残念ながらありません。

こうした状況の中、1月26日から、

地震解析ラボ(Earthquake Analysis Laboratory)が地震予測情報の販売をはじめました。

地震予測情報の精度は未知数なところもありますが、気象庁の天気予報も当たりはずれがありますが目安としての役にはたっています。

私たちは早速地震解析ラボの予測情報の購入をはじめました。

情報を購入して、まずは良かったのは地震予測を読むことで、いつ発生するのかわからない不定愁訴のような不安が消える点です。どこまで信頼性があるのかはわかりませんが、発生予測の一つの指標を得られることは価値があると思えました。

建築と都市に関わる業務をしている弊社としては地震防災対策と危機管理の観点で地震予測を購入し活かしていきたいと考えています。

第二章 魅力が持続する「いき」の建築にする。

一 記憶された家

散文詩「記憶のつくられかた」のあとがきで作者の長田弘は次のように述べています。

「記憶は、過去のものではない。それは、すでに過ぎ去ったものごとではなく、むしろ過ぎ去らなかつたものごとだ。とどまるのが記憶であり、じぶんのうちに確かにとどまつて、じぶんの現在の土壌になつてきたものが記憶だ。」

記憶という土の中に種子を播いて、季節のなかで手をかけてそだてることができなければ、言葉はなかなか実らない。じぶんの記憶をよく耕すこと。その記憶の庭にそだつてゆくものが、人生と呼ばれるものだと思う。「

含蓄のある言葉です。

物を所有しても、こころのなかに入るときは、記憶される言葉となつてからおもいます。心には、物を所有しているか、していないかは関係ないようにおもいます。

私には12歳まで住んだ家の記憶、それから18歳まで住んだ家の記憶が鮮明にあります。

じぶんの記憶の中にある家のことを、言葉にすることを試みようと思ひ始めています。

「記憶された家」を言葉にすることは、こころの家、シエルターを築くことのようにおもいます。

その「記憶された家」の中に、現在住んでいる家も言葉としていれようと思ひます。

「記憶された家」をこころの中で言葉で建てることは、こころをつよくしてくれそうにおもいます。こころの免疫力をたかめるようにおもいます。

二 「別宅」づくりのお勧め

こころ数年、

- ・隣地の建物を買われて別宅に改修するプロジェクト
- ・新築する建物の最上階に長年集められた美術骨董を飾る別宅をつくるプロジェクト。
- ・ゴルフの練習のための別宅をつくるプロジェクト。
- ・音楽に浸ることを楽しむ別宅プロジェクト。
- ・ちよつと昼寝をしたり本を読むための別宅プロジェクト。
- など・・・別宅プロジェクトが増えてきていますので、「別宅」とはなにか？について、私なりに少し考えて

■「別宅」づくりのお奨めと題して書いてみました。

<http://www.nonose.jp/about/photo/133128822740-file2.pdf>

ABOUT USの「専用住宅・集合住宅」にPDFで掲載しました。

別宅での過ごし方は、お独りでも、ご夫婦でも、家族でも、友人たちでも、

過ごしかたはいろいろだと思います。

ただ、

本宅とは違う、開放空間、遊びの場として過ごす場とすることは暗黙のルールとされているようです

三 行方不明の時間

人間には

行方不明の時間が必要です

なぜかわからないけれど

そんなふうに囁くものがあるのです

からはじまる心にしみる詩を読みました。茨木のり子さんの詩集「倚りかからず」の中でみつけました。わたしも、仕事以外の時はずいぶん行方不明でいるようにしてきました。

どこにもいない自分になつて、昼寝したり、ボーとしたり、詩を読んだり・・・過ごします。

行方不明でいることの解放感、じぶんのこころの声に純粹に耳を傾けていられる自由感・・・が好きなのです。「別宅」は行方不明の時間を過ごすことの一つのように思ひます。

四 建築デザインのリアリティ

建築デザインは自由でしょうか？

という問いは

人は自由でしょうか？に近い問いのようにおもえます。

人は自由なようでも限りなく不自由であり、

不自由なようでも心の中は限りなく自由でもあります。

心と実体とのどちらにリアリティがあるのでしょうか？

実際に建てられる建築と心の中に現象する建築とどちらにリアリティがあるのでしょうか？

こうした設問は堂々巡りのようにおもいます。

どちらもリアリティがありますし、夢幻ともいえます。

では、何をベースにすればリアリティを捉えられるのでしょうか？

人間の生活文化、建築文化の厚い層の中でそのコアとして存在し続けるものがベースになるように思います。コアの中で自分に自然に流れ込んでいる文化をベースとなるトラッドとして、新たに惹かれるモダンな要素と

ミックスさせるデザインのありようを深めていければと思います。

五 「生きる建築」のデザインは、トラッドモダン

建築デザインは自由でしょうか？

という問いは

人は自由でしょうか？に近い問いのようにおもえます。

人は自由なようでも限りなく不自由であり、

不自由なようでも心の中は限りなく自由でもあります。

心と実体とのどちらにリアリティがあるのでしょうか？

実際に建てられる建築と心の中に現象する建築とどちらにリアリティがあるのでしょうか？

こうした設問は堂々巡りのようにおもいます。

どちらもリアリティがありますし、夢幻ともいえます。

では、何をベースにすればリアリティを捉えられるのでしょうか？

人間の生活文化、建築文化の厚い層の中でそのコアとして存在し続けるものがベースになるように思います。コアの中で自分に自然に流れ込んでいる文化をベースとなるトラッドとして、新たに惹かれるモダンな要素と

ミックスさせるデザインのありようを深めていければと思います。

小説には純文学、推理小説、時代小説、SF小説などのジャンルがあります。

建築のデザインはどうでしょうか？

モダンデザイン、伝統的デザイン、アバンギャルドデザインなどのジャンルがあるようにおもいます。各ジャンルの中も細分化されて過激なものから穏健なものまで多様な流れがあります。

そうした中で、

私たちの事務所のデザインは、

モダンを基調にした「トラッドモダン」です。トラッドとモダンのミックスです。

今から20年前にポストモダンといわれるデザインの潮流がありました。モダンデザインに歴史的デザインを意識的に操作して混淆させるものでした。私のデザインはポストモダンに間違われることもありませんが、そうではありません。

私はモダンとトラッドが混じった生活と感性から自然に生まれるデザインを大事にしてきたのです。

昔、デザインしたジャストシステムのブレインズパークの竣工見学会に來られた若い建築家にクラシック過ぎるといふ指摘を受けました。もつとハイパーモダンなデザインをするべきだと思われたのだと思います。ですが、私はハイパーモダンなデザインは知的には興味はありましたが、自分ではやろうと思えませんでした。建物やファシジョンや街は馴染めて日常生活ができるかどうかが大事で、そのためには歴史的に形成されたトラッドデザインを基盤にするのが条件となります。

トラッドモダンデザインが「生きる建築」デザインと考えています。

第三章 機能更新を受容できる建築にする。

一 「生きる地域都市」をつくる

最近、地域都市の中心市街地では1960年代頃に建てられた鉄筋コンクリート造の建物の解体撤去が増えている。使い道が無くなったことや遺産相続なども絡んでいるのだろうか。背景には人が減り、不用になつた建物が続出してきていることがあるのだろう。

跡地は例外なくコインパーキングなどの駐車場になる。すると駐車場不足に喘いでいたので結構繁盛している。過密気味であつた中心市街地にゆとりが生じてきている。これをまちが枯れていつていると言う人もいるが、案外悪いことばかりではないようにおもふ。駐車場が増えることは周辺の生活の利便性が高まることとなるからだ。

残つた商店や住宅で人がゆつたりとした生活を続けることができればいいとおもふ。

コインパークが不採算になれば、次には家庭菜園のような畑地になつてゆくのだろう。

都市農が増えていくように思う。

城下町のような歴史のあるまちで、安土桃山時代頃から現代までの歴史が刻まれた建物が集まっている地域都市中心市街地での暮らしは奥深く結構面白いところがある。それは、郊外の新興住宅街や再開発巨大施設には望めない奥の深い魅力である。

古い建物を壊すのではなくて、耐震リニューアルして新たな機能を付加して生きる建築にすれば、数十年延命する。延命を繰り返して100年以上大切に使い続けることが、文化と環境と経済の安定に繋がるとおもふ。

最近中心市街地も地価が大幅に下がつているので、郊外に土地を求め新築することと同程度のコストで中心市街地の古い建物を購入して耐震リニューアルできるようになつてきている。(郊外の自然環境の良いところは別宅が適している。ロシアや東ヨーロッパなどの国では、郊外に農地付きの別宅を構えていることが多いと聞きます。週末は別宅での暮らしを楽しむ。経済動乱のときは別宅で生産した農作物で随分役立つたと聞きます。このような生活スタイルはこれからの日本の地域都市では増えるように思います。)

中心市街地は都市的基盤整備が整つているので、生活面で郊外にない魅力がある。
このようにして

生きる建築が集まつてできる「生きる地域都市」づくりが、これからの都市のあり方の一つだとおもふ。

地域に居住する建築家には、膨大な中心市街地の鉄筋コンクリート造の建築をコストパフォーマンスに十分適う方式で、耐震リニューアル＋機能再生をして「生きる建築」にする方法を提案して、地域の安定的で豊かな生活を支える環境づくりに取り組むことが求められている。

二 鉄筋コンクリート造の建物を、リニューアルをとおして、「生きる建築」に

既存の鉄筋コンクリート造の教育施設、医病院、住宅等の機能とデザインと設備などのリニューアルをとおして「生きる建築」にするプロジェクトを数々手がけてきました。

鉄筋コンクリート造の建物を壊さず、長く使い続けることは、技術的に可能であり、環境再生、経済面の安定、街の落ち着いた雰囲気形成など様々な視点からみて重要なプロジェクトです。

築40年～50年を経た鉄筋コンクリート造の建物は数多くあります。

半世紀かけて形成された建物群です。建てられた方の汗と努力の結晶です。そして、建物は所有者にとつても、町にとつても大切な資産です。築50年程度では未だ新しいという見方に転換して、リニューアルしながら100年、200年・・・と使い続けるという考え方が大事になつてきています。

手入れをされず使われている建物や使われなくなつて放置されている建物を目にする時、どうにかできないか・・・・・・・・と考えてしまいます。方策を考えていきたいと思ひます。

三 生きる建築のために、家の補修はDIYで

家を長年使い続けていると、不具合になるところがでてきます。

家は耐久消費財などと言われるので、なんだか一度できると長時間故障しないかのように思われがちですが、

どのようにしっかりとつくった家でも、

家は物の集合体ですので劣化は進みます。そして故障したりします。

何百年も維持されているお寺などは、補修の積み重ねで現在があるのです。

不具合を早期発見、早期補修が建築の維持には欠かせません。

今までの日本では、

不具合が出ると職人さんや建設会社やリフォーム会社さんに補修をお願いすることになりましたが、成熟した社会にはいった今は、自分で補修する時代です。

自分でできる補修は自分ではやられる方が手早く補修できますし、費用も安くすみます。

又、ご自分で汗を流して補修すると家に対しての思いが深まります。

ネットでも多くのDIY補修サイトを見かけます。

その一つをご紹介します。

<http://mayap.net/>